接続詞の機能

森田良行

一、問題の提起

今日、いわゆる接続詞といわれる一群の語は、その品詞性における概念規定や文法論上の所属問題に関して異説が多く、定説を立てることは他の諸品詞に比して困難なように思われる。接続詞を、その語性の面から考究することや構文の観点から機能を分析研究することは、接続詞研究にとってきわめて重要な問題であり、その早急な着手が要請されているにもかかわらず、なお今後の課題として残されているという事実は、かかる理由によるのである。近年、時枝博士の提唱により、文法学に文章論の領域が加わったことは、接続詞研究に大きな光明をもたらした。すなわち接続詞研究も、語論・文論上からのみなされるのではなく、あらたに文章論的見地から推進される可能性が与えられ、研究に一段の進展が約束されるに至った。[注1] 従来の文法観に従えば、文をもって文法研究の極限とするのであるから、文表現のわく内にある語については構文上の働きを把握することも可能なのであるが、接続詞のように、文表現のわくを越える場合のあるものに対しては その射程外にあると言わねばならない。そのため、接続詞を文章論の領域にくり入れ、文章論における成分とすべきではないかとの考えも生じてくるのである。文章を文の連鎖もしくは陳述の連鎖と考えるかぎり、右の処理も妥当なわけである。

一方、接続詞と類似した機能をもつと目される接続助詞はどうかというに、これも句を連接するという点では接続詞の機能のある面と共通する。しかし、接続助詞は、それに上接する用言もしくは活用連語の活用形を自ら規制し、陳述を完結させずに以下へと展開せしめる。このため、形式上は、先行文を受けつがず先行句を受けついで文中に位置するというふうに判断される。接続詞が、機能的には先行文を受けつぎながらも、形式的には先行文といちおう断絶して後続文中に入りこんでいる場合が比較的多い事実にくらべると、これは両者間を区別するきわだった相違点と見なすに好都合である。そのため、かかる形式上の相違点に着目して、両者の差異を説こうとする試みもなされてきた。[注2] だが、それらの説は、いずれも、形式上の切れ続きから両者の表現上のニュアンスの違いを誘導させ、かかる文体的相違にのみ両者の相違点

を認めていこうとする立場で、機能上の違いを認めようとはしていない。したがって、接続詞も接続助詞も機能的には全く同一であるとの見解にはじめから無条件に立っていると見られるのである。しかし、両者の機能は全く同一であると断定することがはたして妥当かどうか、この点が今後の問題点として残ると思うのである。

接続詞を文章展開の重要な標識として文章論の立場から論ずべきであることを提唱された時枝誠記博士は、言語過程説の立場から、接続詞を、二つの事実の関係に対する話し手の立場の表現として、辞に所属させるべきであると説かれた。[注3] そして、接続詞と接続助詞とは、関係に対する話し手の立場の表現という点で共通するが、独立して句を構成するか否かという点で異なるという。[注4] 博士の説に従えば、接続助詞は先行の「詞によって表現される事柄に対する話手の立場の表現」であり、接続詞は「先行する表現に対する話手の立場の表現」である。[注5] ここで「表現される事柄」と言い「表現」と言われたのはどのような理由によるのかにわかに断じ難いけれども、用言に添う統括作用によって示される叙述内容を「事柄」と考え、詞＋辞によって表わされる「叙述内容＋陳述」を「表現」と言われたものと判断する。この観点からすれば、接続助詞は「先行の叙述内容を受け、それにともなう未完結の陳述性に対し、後続陳述との関係に対する話し手の立場を加え、かつ有形化する語である。」一方、接続詞は「陳述作用によって統括された表現そのものに対して、それと後続表現との間の関係に対する話し手の立場のみを表わす」と説明することができるかと思う。このように、過程説においては、接続助詞と接続詞との機能の相違をいちおう区別することは可能のようである。しかし、この場合、用言に直接する接続助詞と、辞である助動詞を介して付く場合とで、その機能に相違を認めるのかどうかという問題や、「〜て」「〜ば」のように活用機能によって示される関係以上には特に異なる立場を付加せぬ接続助詞と、「〜が」「〜から」のような接続助詞との間に相違を認めるのかどうかという問題、さらに、詞同士の関係を示す接続詞の機能をどのように扱ったらよいのか、という問題が残る。

たしかに、接続詞や接続助詞は関係に対する話し手の立場を表わしている。[注6] しかし、それが具体的に何と何との関係なのか、個々の事例についてあまり厳密に検討されていなかったと思う。この点を追究していくことにより、両者の機能上の特色はもちろんのこと、先にもふれたように、無条件に両者の機能を同一視することの是非も判然とするはずである。両者の果たす機能に対し、文章論における構文法の立場からの再検討が要請されるのである。

二、陳述作用と展開機能

表現機能の面から考えた場合、文表現にとって特に重要な働きをなしている場所は文末および句末である。つまり、そこには統括（統叙・統覚とも）作用が働き、陳述作用が行なわれているからである。詞によって表わされる概念が辞との組み合わせにより順次統合されて述語に至るとき、そこに現われる辞もしくは用言に添う統括作用によって、統一された叙述内容が、陳述作用の添

加によって段落を作る。[注7] この場合、陳述作用が完結すれば、一の文表現として終止し、また、未完結形をとれば、句表現として後続句への展開を約束する。この時、後続句に対して先行句がどのような立場にたつかによって、引用法・修飾法・条件法・平接法等、陳述形式に相違を生ずるわけである。これを再展叙と考えるか低い陳述度による未完結形式ととるかは、考え方の違いでしかない。いずれにせよ、この部分に文脈の展開が行なわれていることは確かである。

ところで、陳述作用が完結して文表現が成立した場合、たしかに文末で文脈はいちおうストップしてはいる。しかし、それは文表現という立場においての話であって、これを文章表現という巨視的立場において見た場合には、文脈のストップは文脈の完結を意味しない。いや、むしろ文脈の連続を予想させる部分なのである。このことは、陳述の完結は文脈の完結とは別であることを意味する。文表現においては、文の完結性は陳述作用の完結性によって支えられていた。一方、文章表現においては、文章の完結性は文脈の完結性によって支えられていると考えることができる。そして、文脈の完結は、そこで文章の構想が統括されたことを示しているとも言えるのである。

では、文脈の完結はいかなる形式によって示されているか。文の場合には述語にともなう陳述形式という確かな目印しが得られるのであるが、文章の場合、有形化された手掛りは得られない。文章の完結性は、文の完結性のようにはっきり形式上に表われない。むしろ話の筋とでもいうべき叙述内容の問題に帰せられねばならぬであろうか。文章の場合には、あとあとといくらでも書きたすことが可能で、ここで完結したからもういかなる叙述も付加することを受けつけないということはない。[注8]

このことは、文末における陳述は、次の展開の可能性を約束する、ということである。句末のように必ず展開すべきものでもなく、さりとて絶対に展開不可能という性質のものでもない。一口に言えば、陳述は展開性を潜在する。さらに言えば、陳述作用は展開性を潜在し、その作用が弱い時には潜在している展開性が表面に現われて次の句表現を要求し、後続句の述部における統括作用によって全体を統括し、叙述内容を一本化しようと働きかける。陳述作用が高い時（完結形）には全き統括が行なわれ得るので、展開性は影をひそめ、文章表現としての展開の可能性のみを潜在させる。

以上を具体的に形式面に求めれば、次の四種となる。

㈠連用形中止法にともなう陳述作用はかなり強く、先行句の叙述に対する展開性が前面に現われ、接続語の助けを借りずとも、詞の活用機能のみでも展開機能が果され得る。

㈡詞にともなう助動詞が「たら、なら」の仮定条件形や「らしく、で」の中止形をとる場合には、接続助詞の助けを借りずとも、辞の活用機能のみでも展開機能が果され得る。

㈢同じ辞の活用機能でも、それが順接ならびに逆接の確定条件表現をなす場合には、辞の活用機能のみでは展開性がじゅうぶんでなく、「から、ので、が、けれども、のに」等の接続助詞の助けを借りねばならない。

㈣詞自体の活用機能においても同じで、用言の仮定形に「ば」、連用形に「ても」、終止・連体形に「と、から、ので、が、けれども、のに」等がともなう条件法も、詞の活用機能のみでは展開性が完全でなく、接続助詞の助けを借りねばならない。

ここで注意せねばならぬことは、㈠〜㈣のおのおのが展開性の性質において同一ではないということである。

1　詞および辞の活用機能のうち、連用形中止法は展開性が顕在し、接続助詞「て」等の力を借りずとも展開の可能な形式である。活用機能が展開機能をも兼ね得る形式である。ただし、それは並列・累加といった平接のみしか行なえない。

2　詞に「たら・なら」が添って条件表現をなす場合にも、接続助詞「ば」の助けを借りずとも展開機能は果され得る。ただし、この活用機能に顕在する展開性は仮定条件順接を本来とする。それも、「モシ……スレバ」のような因果関係の確然とした条件表現ではなく、「……スル、ソノトキニハ」という条件的表現（私はこれを「半条件」と命名しようと思う。[注9]）の場合のみである。英語に訳せば If よりは When に近い。次の3のような純然たる条件表現はあらわし得ない。

3　中止法、なら・たら以外はいずれも活用機能のみでは展開が行ない得ず、接続助詞をともなうことによってはじめて展開機能が成立する形式である。仮定形に「ば」、連用形に「ても」、終止・連体形に「と、から、ので、けれども、が、のに」等が下位承接して成立する展開性。この場合には順接・逆接を含めた仮定・確定の条件を表わす。しかも、この種の条件表現は因果関係の確然とした条件なのである。

以上は、述語にともなう陳述作用が未完結形式をとるため、文中にあって句を形づくる場合の展開性である。接続には以上の「句を受けるもの」をも含めて次の三通りが存在する。

㈠、陳述作用をともなわぬ詞（体言）もしくは連語を受けるもの。

㈡、未完結の陳述、すなわち句を受けるもの。

㈢、完結した陳述、すなわち文を受けるもの。

㈠は一般に語を結ぶものと言われている形式で、「梅・桃・桜……」と語を並列する以外に、助詞「と」「や」等を用いることも多い。また、「梅・桃、そして桜……」と接続詞を用いることもできる。

「これは私の本と‖、あなたの本と‖、そして‖彼の本だ。」

のように助詞と重ねて用いることもある。さて、ここで問題なのは、これら詞を結ぶ接続関係は、句や文の接続関係とは違って、陳述関係に対する話し手の立場を表わさない。これはあくまで事柄と事柄との関係でしかないということである。つまり、この接続関係は統括以前の段階に属し、叙述内容における素材間の関係に対する話し手の立場をあらわしている。あくまで句の中に位置するのであって、決して句と句の中間に立たない。この事実は、語間に立つ接続詞は、接続助詞には代行せず、「本と|ノートがある。」「本や|ノートをください。」「本か|ノートがありませんか。」等に見られる「と」「や」「か」のような叙述段階に属する助詞に代行し得る、もしくはその直後に位置し得る点からも了解しうる。

語間に立つ接続詞が事柄（素材概念）と事柄の関係に対する話し手の立場を表わすものであり、それがいずれも「そして、それから、また、あるいは」のような並列・累加・選択など、平接の接続詞のみであるという点は特に注意していいことだと思う。

(ロ)の、未完結の陳述である「句」に続く接続詞はどうかというに、

「私の好きなのはうなぎで、そしてきみの好きなのは天ぷらだ。」

「夏は暑く（て）、そして冬は寒い。」

のように、中止法に後続する接続詞はいずれも平接のみであって、条件を表わす接続詞が立ち難いこと。[注10]「～なら、～たら」の半条件法には接続助詞の「ば」は下位承接するが、「ば」を介して、もしくは直接に「なら、たら」に続くべき接続詞は存在しないこと。けっきょく条件表現をなす句には、仮定順接（～なら、～たら、～ば、～と）以外の接続関係の時しか接続詞は現われず「～なら、～たら、～ば、～と」には接続詞の現われるべき可能性が全くないことが知られる。

「雨が降るなら（ば）、［　　］遠足は中止したほうがいい。」

「雨が降ったら（ば）、［　　］遠足は中止になります。」

「雨が降れば、［　　］涼しくなる。」

「雨が降ると、［　　］涼しくなるんだが。」

「雨が降っても、［しかし］遠足には行きます。」

「雨が降ったので、［だから］地面がぬれているんです。」

「雨が降ったけれど、［しかし］ちっとも涼しくならない。」

(ハ)の、完結した文には、平接（そしてあるいは、等）、仮定条件（だったら、だとしても、等）、確定条件（だから、しかし、等）のいずれの接続詞も続き得ることは、説明するまでもない。

以上、るると述べてきたことを表にまとめると、右上のようになる。

	文の接続	句の接続：その他の条件	句の接続：～と ～ば 条件	句の接続：～たら ～なら 条件	句の接続：～て 中止法 接続	語の接続
活用機能のみによる				○	○	
接続助詞による		○	○	○	○	
接続詞による 平接	○				○	○
接続詞による 条件接続	○	○				

三、接続詞と接続助詞の機能

接続詞と接続助詞とを、展開の機構から比較すると、そこにはっきりとした相違が認められる。詞によって示される述語が、自身の統括作用によってそれまでの叙述に段落をつくり、述語にと

もなう辞の陳述作用によって表現に陳述性が与えられる。この場合、陳述が完結すればもちろん文表現として終了するわけである。その時は、完結した陳述作用が展開性を潜在させ、あらたに文表現が後続する時は、そこに文章文脈の流れが生ずる。が、先行文の叙述内容は、陳述の完結にともなって後続文とは完全に区切られてしまう。ただ、本来別個であるべき二つの叙述内容が、話し手の主観によって関係づけられているにすぎない。したがって、ここには接続詞の介在は許されても、接続助詞の存在は許されない。一方、陳述が未完結形式をとる場合には、陳述作用が弱いため、述部における統括作用の不完全さを招来し、叙述は次句へと持ちこまれる。後続句における統括作用が先行句をも含めた全体を一の叙述内容として統括することを期待する。したがって文表現における文脈は展開部においてもストップせず、後続句へと連続していると考えなければならない。中止法、仮定条件法等はこの弱い統括の現われである。

このように低い陳述度を受けて次句へと展開を進めるためには、陳述作用に潜在する展開性のみでは展開が不十分なため、活用語に下接して積極的に展開性を賦与するものが必要となる。それが接続助詞によって行なわれている事実は自明のことである。接続助詞が句と句の連接点にのみ現われるということは、右のように解釈しなければ説明がつかないであろう。ところで、中止法や半条件法が接続助詞の機能を必ずしも必要としないという点は、その展開性が文と文との展開性にかなり近いことを思わせる。先行句の叙述内容が展開点において区切られる度合いが高く、後続句へと持ち越される率が条件法に比して低い。つまり「～なら、～たら」の展開性が「～ば、～のに、～ので」等によって生ずる展開性に比して強いということであって、同じ条件的な言い方でも、「～なら、～たら」の場合は「～ば」などに比べると、条件に対する結果が比較的自由で、偶然性を持つことからも容易に伺い知られよう。

弱い陳述作用は、陳述の完結を後続句にまたねばならず、したがって展開することを宿命とする。この未完結の陳述作用を受けて展開性を賦与するのは接続助詞の機能である。接続助詞は句を受けることが務めで、文を受けることはあり得ない。文末の完結した陳述は展開の可能性を潜在させはするが、展開することを宿命としない。後続文が成立することによってその可能性が実現するだけである。その場合、展開の可能性を具体化しているのが接続詞だと考えられる。

右の考え方を裏づけるために、例を一つ挙げてみる。

「西の空が赤いから、あしたは天気だ。」

「西の空が赤い。だからあしたは天気だ。」

接続詞は展開の形式化に過ぎず、前表現を受けて展開性を賦与する働きをもたない。それゆえ、右例の「だから」をずらして、

「西の空が赤い。あしたはだから天気だ。」ともなし得る。[注11] 接続助詞は、このような次表現への移入はできない。接続助詞は展開性を付加する機能をもつゆえ、句末に位置せざるを得ないのである。これと同じような例で、

「あしたは雨が降るさ、だけど。」

というのがある。「あしたはお天気になると困るナ」と話し合っている時、「だけどあしたは雨が降るだろうヨ」と自身お天気になることを否定して安心感を得ている場合である。したがって文末の「だけど」は以下の叙述に対しての関係ではない。先行表現に対する関係と見るべきであろう。文頭において無形式であった展開性が、文末に至って形式化されたものである。このように、接続詞が文末にすら移行し得るということは、それが展開性を賦与するのではなく、本来存在していた展開性が形式化されたものに過ぎないことを裏づける。接続助詞が助詞として常に詞を前提として成立するのに反し、接続詞がそれ自体「句」として自立しうることは、そこに右のような機能上の相違を認めなければ説明がつかないように思われるのである。

接続助詞は接続詞に先行する。

「天気はいいが、しかし海へは行かないよ。」

用言「いい」にともなう陳述性は展開の可能性を内蔵してはいるが展開性は具有しない。これに展開性を与えるのは接続助詞「が」である。その「が」によって具体化された展開性の場に位置することによってその展開性を形式化するものが接続詞「しかし」の働きと考えていいかと思う。接続詞は展開性の賦与ではなく展開したものの形式化に過ぎない。接続詞のない二文間はその無形式と考えられる。展開の相を図示すると次のようになるであろうか。

展開形式

展開機能

陳述機能

活用機能

叙述内容

体言……用言＝助動詞＝接続助詞＝接続詞＝後続表現

四、条件接続詞の性格

接続詞は展開性の形式化である。しかし、その展開性はすべてが等価なものではない。「だから、しかし」等で示される条件接続詞と「そして、あるいは」等の平接接続詞では、接続の面ではっきりとした相違が見られる。前者は条件の接続助詞で提示される展開性（句）を受けるか、完結した陳述性が提示する展開の可能性（文）を受けるかのいずれかである。後者のように、中止法や語を受けたりはしない。これを展開の機構の面から分析すると、およそ次のごとくなるかと思う。すなわち、用言もしくは辞によって統括された叙述内容が、活用機能や辞にともなう陳述作用を受けて先行文（または句）を形成し、直接または接続助詞を介してその展開性が接続詞へと形式化する。それゆえ、条件接続詞は、展開の前後関係から考えて、「統括された叙述内容＋陳述作用」を受けると考えざるを得ない。陳述作用をともなう先行表現が、後続表現とどのような関係にあるか、その話し手の立場の形式化とも考えてよかろう。

このことは、条件接続詞が先行表現にともなう陳述性をふまえ

て展開するものであることを意味する。条件接続詞の多くに「だが、だけれども、だから、だのに」のように、語源的に見て先行表現の陳述性を含めたものが圧倒的に多いということも、右のような理由によるものと思われる。ちなみに平接の接続詞に当たってみると、このような陳述性を内包した語例が存在しない。（このことは後で触れるが、平接の接続詞には、「それから、そして、それとも」のように指示語が多いことは注意を要する。）

条件接続詞が、陳述作用を含めた先行表現全体を受けるということから、先行表現の陳述部に現われた表現スタイルと密接な関係を生じてくる。先行表現において陳述作用と平行して行なわれるスタイル形式（だ体、である体、です体、でございます体、等）の選択は、陳述作用を受けとめている条件接続詞の形態をも規制しようとする。「だが――であるが――ですが――でございますが」の対応は右の事実を如実に物語るものである。接続詞が、文末と同じく、表現のスタイルを知る大きなめやすとなるというのは、実は陳述をも受けとめる条件接続詞に限って言えることなのである。

条件接続詞が陳述を受けとめるということは、逆に言えば、陳述作用をともなわない連語には付き得ないということにもなる。

「彼女の実家は、すなわち彼女の父の家は、山形にある。」

「私の机は、そして私のいすは、いずれも父が子供のとき使っていたものだ。」

右の「すなわち、そして」の平接接続詞はいずれも陳述作用のともなわぬ連語を受けとめている。ところが、条件接続詞ではこのような連語を受けとめることはできない。「彼の実家は、しかし東京にはない。」とか、「私の机は、だけれども父が子供のとき使っていたものだ。」などとは言えない。（前に述べた後続文への移入は、これとは別の現象である。）

条件接続詞が先行表現における陳述段階までを受けとめるという性格から、

太郎「彼はすごい金持ちだよ。」

次郎「しかし……」

とか、

「ちょっとつごうが悪いんです。ですから……」

のような言いさしの言い方を可能ならしめる。このような省略形でも、後続表現の意図するところは或る程度理解し得る。なぜなら、「しかし」や「だから」は、後続表現が先行文の叙述自体に対してどのような関係にあるかを現示する語だからなのである。極端な例ではあるが、言いわけに使われる「だからなんです。」や、また、「彼の解答は『しかし』だった。」のような言い方でも理解が可能なのは、右のような理由によると言っていい。

五、非条件接続詞の性格

次に「そして、それから、それとも」で代表される並列・累加・選択等、平接の接続詞に話を移そう。平接の接続詞は先にもふれたように、陳述の完結した「文」にも続くし、中止法や、また接続助詞の助けを借りて「句」に後続することも多い。もちろん叙述段階にある語（詞）や連語を受けて「句」の中で働くこと

もできる。このことは一見、平接接続詞の機能がきわめて多様性をもつかの錯覚を与える。しかし、統括作用をもたぬ語や連語を受けとめることができる点、また、

「海へ行けば、そして思いきり泳げば元気になるでしょう。」

のように、統括された句を受けているように見えて、実は単なる並列関係として間に立っているに過ぎない事実（この場合、「行けば」は文脈の方向からは「元気に」へと展開している）等を考え合わせると、平接接続詞は陳述作用をともなう統括された句もしくは文を受けとめると考えるのは誤りであろう。形式上は句もしくは文に直接する場合でも、やはり先行句（文）の叙述内容のみを受けとめているのであって、陳述作用をも含めた叙述そのものを受けとめているとは考えられない。

「ややあって彼はおもむろに口を開いた。そして驚くべき事実を語り出した。」

「ややあって」は「口を開いた」に係っているのであろうけれども、文末の完結した陳述を越えて、次文の「語り出した」へも係るととってさしつかえないかと思う。この事実は、非条件の接続詞は本来陳述を受けるのではなく、事柄としての叙述内容のみを受けるため、たとい先行文の陳述が完結していても、それとは無関係に叙述内容のみを受けついで文脈の連続が維持される。

「まちがいなく彼はその事実を知らないのだ。あるいは誰かに口どめされているのだ。」

右の例も、これとほぼ同じであり、しかも、

「彼がその事実を知らない、あるいは誰かに口どめされているのはまちがいない。」

と言いかえることが可能な場合である。

条件接続詞は、先行表現における陳述作用の段階まで受けとめる。非条件である平接の接続詞は叙述過程の段階までしか受けとめない。前者は、先行表現の叙述を受けて異質の陳述へと文脈を展開させる。後者は、先行文または句・語の示す叙述内容または意味内容を一の事柄として受けとめ、それと後続文（後続句・後続語）との関係を表示するに過ぎない。条件接続詞において多く見られる表現のスタイル形式の顕現は、非条件接続詞には現われない。これも、非条件接続詞が陳述以前の段階における関係表示という機能の一証左となるであろう。また、条件接続詞の多くが「だから、ですが」のように語源的に先行叙述における陳述語を含むのに対し、非条件接続詞にはこのようなものが見当たらず、逆に、語源的に先行表現における叙述内容や事柄を指示する「それに、それから、そのうえ、そ（う）して」などが多い点も、事柄としての叙述内容を受けとめていることの現われと考えていいと思う。

条件的接続関係を示すもので、指示語を含む一群のことばがある。しかし、これらの多くは一語とは認め難いものがほとんどでむしろ「接続語句」とでもいうべき類である。

そうしたら、そうすれば、そうするなら、そうだとすれば、そうだったら、それゆえに、そのために、そういうわけで、その意味で、そうはいうものの、そうではあるが、そうではあっても、そうでないまでも、そうでないにしても、そうで

なくても、それでも、それなのに、それどころか、それでいて、それにしても、それほどでなくても、それでなくてさえ

これらは「そう」「それ」が先行表現に示された素材概念または叙述内容を表示している点で詞と考えねばならず、したがって全体は詞と辞の結合による句と考えねばならない。[注12] これらには「もし、たとい、まったく、ほんとうに」等の修飾語を冠し得る点も、一語の辞とは認め難い理由の一つである。しかも、これら接続語句には、本来接続詞の持たなかった仮定条件順接（～なら、～たら、～ば、～と）の条件関係を表示するもののある点は注意を要する。前にも述べたように、仮定条件順接をなす陳述性は「～なら、～たら」それ自体もしくは仮定形に「ば」を介することによってのみ成立し、これにあずかる接続詞は存在しなかった。

「受験をあきらめて就職しなさい。そうすればおとうさんは大助かりでしょう。」

右の例のように、完結する陳述性を受けてこれを仮定条件化するには、先行表現の叙述内容を指示してこれを条件化する接続語句の働きによらねばならぬ。接続語句の機能の特殊性は、先行句（先行文）を含めて叙述を展開させるところにある。その意味で関係に対する話し手の立場の表示を機能とする接続詞とは全然違う。いわば、接続詞の機能の不補をおぎなうものが接続語句であるとも言えるであろう。先行表現における陳述作用の言いかえであり、あらたな展開性の賦与である。その意味でこれら接続語句は、接続助詞をともなう句と等価なものと見てさしつかえなかろう。

接続助詞、接続詞、それに今述べた接続語句は、いずれも文章展開にあずかる重要な要素である。[注13] そして、これらを一括して接続語句と見る説もあるが、以上見てきたように、これら三者は展開における機能の面で全く異なる働きを示している。これを単にスタイルの相違としてのみ処理することは、ややもするとその根底にある機能の相違を見落とす結果ともなりかねない。文章をその構文法上からながめた場合、これら三者の相違は歴然としている。要は、三者の相違を云々することではなく、文章表現における展開面の機構を正しく把握することなのである。そのためには中止法・接続助詞・接続詞・接続語句といった展開形式の相違が重要な標識となる点を忘れてはならないのである。

注1　時枝誠記「日本文法　口語篇」二九〇ページ

2　たとえば塚原鉄雄氏は、「接続詞」（続日本文法講座1所収）一五七ページで、接続助詞を「非連続の連続」、接続詞を「連続の非連続、非連続の統合」と呼んでいる。また、「接続助詞が情意的表現、接続詞が論理的である」とも言っている。（同論一六八ページ）市川孝氏は「ことばの使い方接続詞」（日本文法講座5所収）において、両者の機能は全く同一であるとまで断言している。（同論一六九および一七五ページ）

3　時枝誠記「日本文法　口語篇」一六四ページ

4・5　時枝博士同書の一六六ページ

6　佐久間鼎博士も、接続詞の任務として「文に表現された事

案の発現がどういふ場の事態においてするかの関係を表示し、または暗示する」云々と述べている。「現代日本語法の研究」（厚生閣、旧版一一二ページ「接続詞の機能」）

7　ここでは、文表現もしくは句表現を形成する過程を、渡辺実氏の四要素説におおむね従って考えていこうと思う。渡辺実氏「辞の連続」（「国語学」33集）八七ページ、「詞の連続」（「国語国文」27の11）一三九ページ、「修飾法」（「国語国文」27の5）一七ページ。ただし細かい点では氏の説から離れる点が多い。氏は、句を形成する場合は「再展叙」として陳述作用の添加を認めておられないが、筆者は度の低い陳述作用が添うものとして論を進める。三上章氏は、文末・句末に添う陳述作用を、機能上から陳述度として四段階に分けている。（「現代語法序説」一八一ページ）

8　それ自体文章表現と考えられる和歌・俳句等の韻律をもつ形式は除外する。

9　条件表現に関しては、昭和四十一年七月、早大語研日本語教育講習において「条件の言い方」と題して講じたことがある。これは「講座日本語教育第3集」として活字になる予定である。

10　中止法で条件表現をなすと考えられている「夏は暑く、冬は寒い。」や「父は会社へ行き、息子は学校へ行く。」は、文脈に添って考えれば、「暑くて、そして……」「会社へ行き、一方……」と平接にとるのが正しい理解と考えられる。これを逆接条件と考えるのは結果的理解でしかない。

11　ただし「が」や「で」「と」の一音節接続詞は次表現への移入ができない。これらは語源的には接続助詞や断定助動詞が先行詞から離れたものであり、接続詞への転成である。それゆえ「しかしね」「しかしだ」のように間投助詞や断定助動詞を下位承接させることができない。

12　一般に接続詞と言われているものの中には、全体を一の辞と考えることが困難で、詞的なもの（もはや概念内容が希薄で詞と認めにくくなってはいるが）が内に含まれていると見られる語がかなりあると阪倉篤義氏も述べておられる。（「日本文法の話」二三〇ページ）

13　たとえば市川孝氏「文章論」（国語シリーズ57　昭和三十八年四月）一九ページ。なお、接続語句に関しては塚原鉄雄氏の詳細な論考がある。（口語文法講座2「接続語」）

〔追記〕接続機能に対する言語過程説の考え方について、時枝博士に御教示を仰ぎ、種々有益な御意見を賜わった。